

いっしぎあおかい
一色青海遺跡

所在地 中島郡平和町須ヶ谷
調査理由 日光川上流流域下水道事業
調査期間 平成15年6月～平成16年3月
調査面積 7,124㎡
担当者 石黒立人・樋上 昇・早野浩二



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 本遺跡の発掘調査は日光川上流流域下水道事業にともなう事前調査として、愛知県建設部下水道課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成15年6月から平成16年3月にかけて実施した。調査面積は7,124㎡である。

立地と環境 一色青海遺跡は濃尾平野の南西部に位置し、縄文海進期に形成された第二浜堤列と呼ばれる東西にのびる微高地の西端に立地している。標高は現地表面で約1.5mを測る。

調査の概要 すでに当センターが平成2年度から平成8年度にかけて、合計23,500㎡の発掘調査を行っており、弥生時代中期後葉と鎌倉～戦国時代の2時期にわたる遺跡であることがあきらかとなっている。今回の調査区 (03A・B区) は弥生時代の集落のほぼ中央に位置している。

弥生時代 弥生時代中期後葉の遺構としては、掘立柱建物跡4棟以上、竪穴住居跡約100棟、方形周溝墓5基、土坑約1000基、溝約20条を数える。

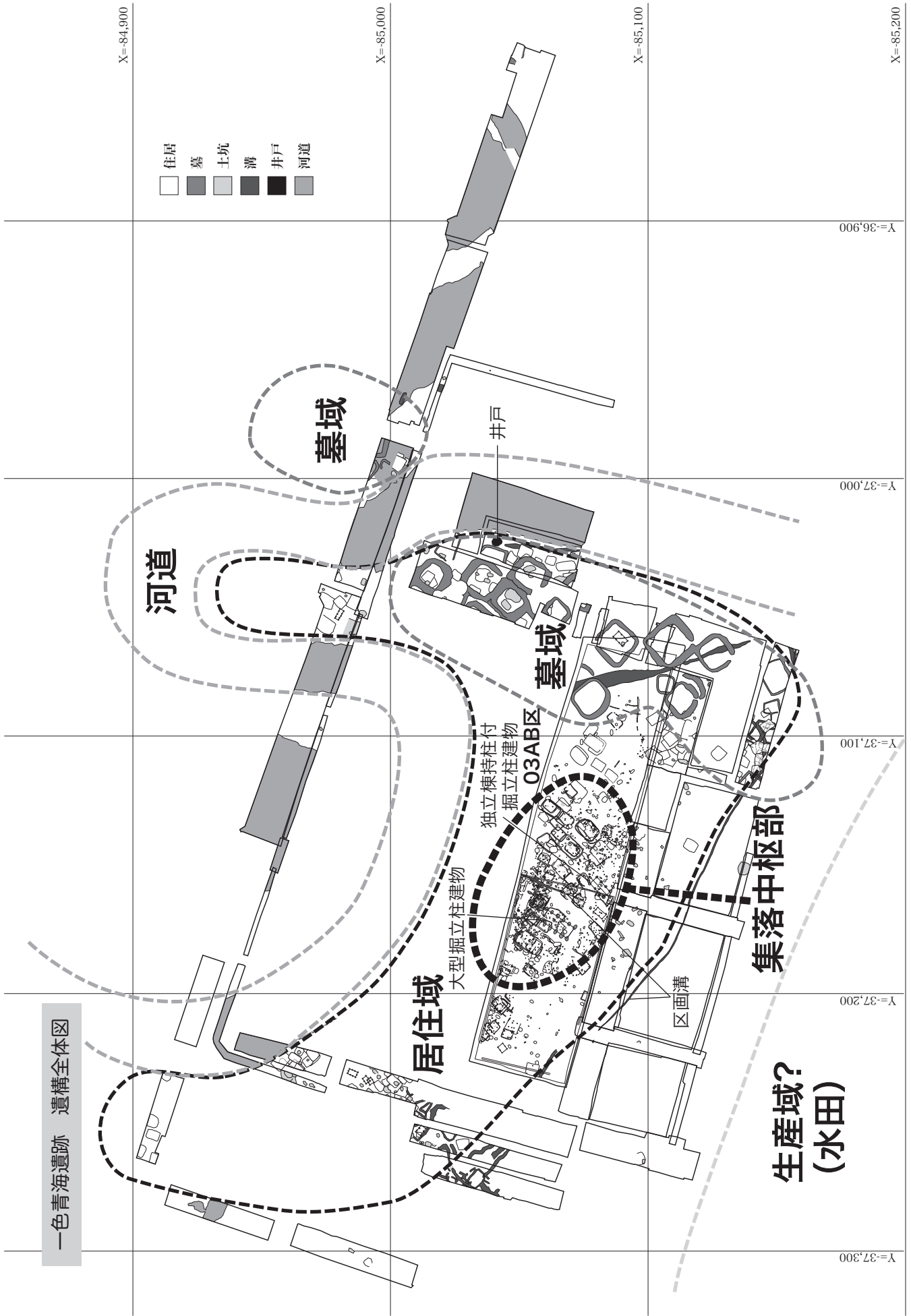
掘立柱建物跡SB17は梁間1間 (5m)、桁行6間 (16.25m) の大型建物である。柱掘形は1.5×1mの隅丸方形を呈し、深さは現況で約1mを測る。柱はすべて抜き取られており、礎板のみが遺存していた。竪穴住居跡SB11を切って築造され、竪穴住居跡SB35に切られており、同一場所での建て替えの痕跡は認められない。SB17の南東に位置する掘立柱建物跡SB77は梁間1間、桁行3間で、独立棟持柱を有している。

この掘立柱建物跡SB17・77の周辺には長辺が10m前後の大型竪穴住居跡が集中している。これらの建物群の主軸はいずれもほぼ同一の方位をとっており、かつ竪穴住居跡はほぼ同じ位置で複数の建て替えの痕跡が認められる。うち、竪穴住居跡SB55・57の炉には、扁平な川原石が縦に埋め込まれていた。また、SB99では土器埋設炉を検出した。前者は伊勢中部あるいは西三河から関東地域に、後者は長野県域に一般的な炉の形態だが、尾張ではこれまで例がなく、いずれもその系譜が注目される。

竪穴住居跡の多くには炭化材が遺存していた。しかし、床面直上からは完形の土器が遺存しておらず、多くの土器片が炭化材より上の埋土中から出土することから、失火ではなく、竪穴住居の廃棄にともなう意図的な焼却である可能性が高い。

方形周溝墓群は調査区の東端部で5基確認した。うち、全形がわかるのはSZ01のみで、墳丘の一辺は約10mを測る。周溝内からは完形の細頸壺数点が出土している。

鎌倉～室町時代 鎌倉～戦国時代の遺構としては、大型の方形土坑が約150基と溝約40条がある。生活の痕跡はなく、墓域として利用されたと考えられる。 (樋上 昇)



一色青海遺跡 遺構全体図

図1 一色青海遺跡弥生時代遺構全体図 (1:2,000)

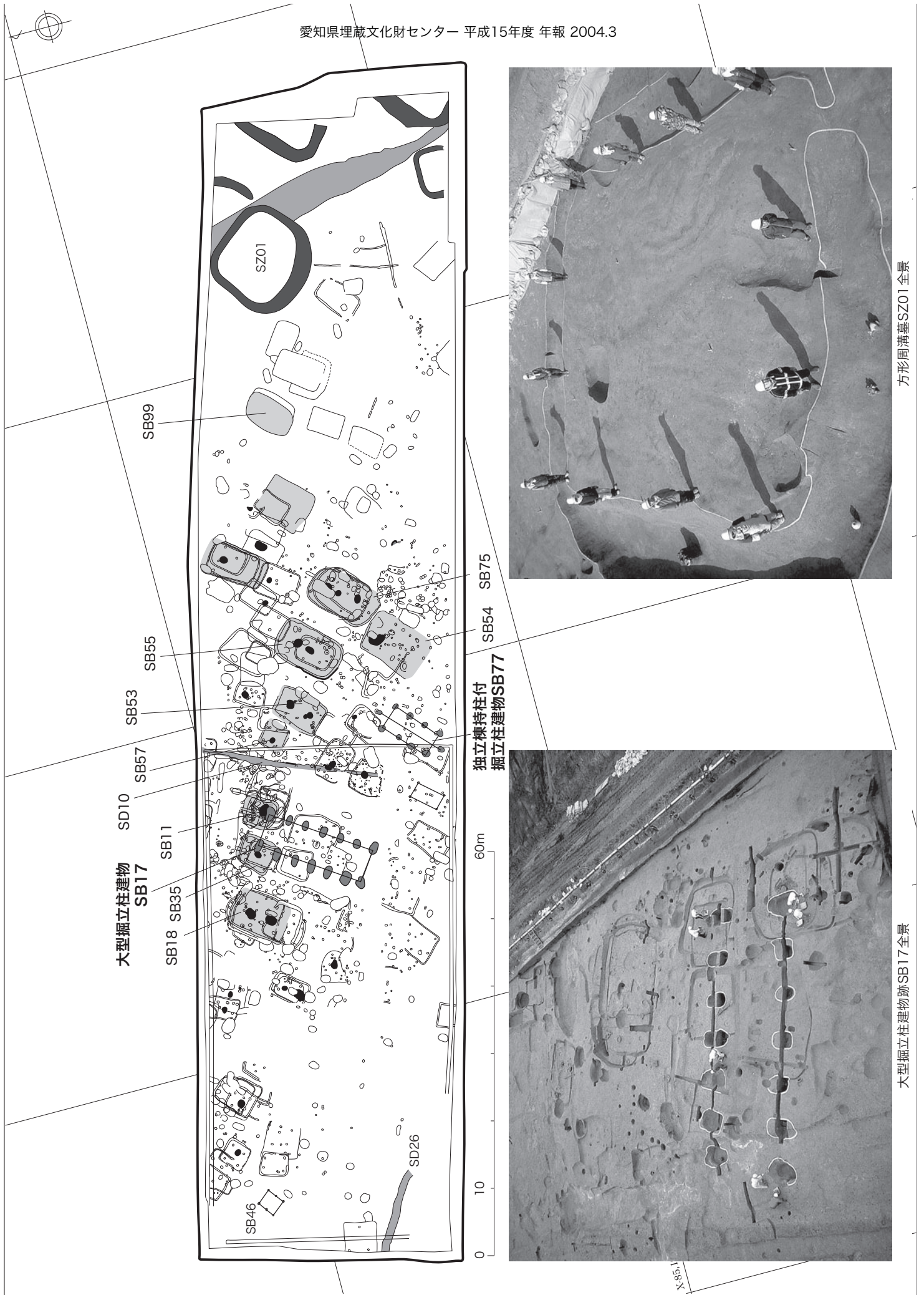


図2 03AB区弥生時代遺構全体図 (1 : 700)

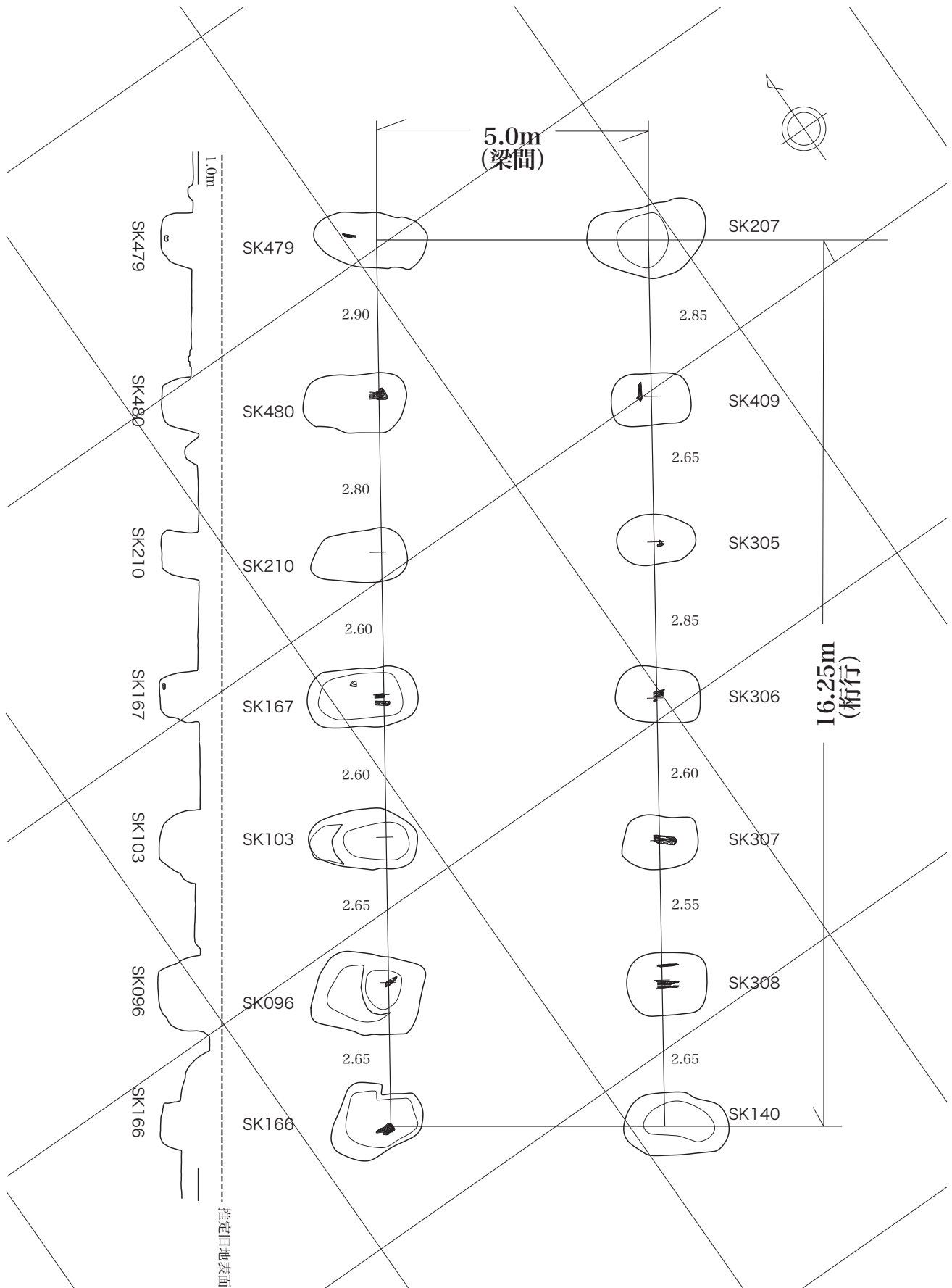
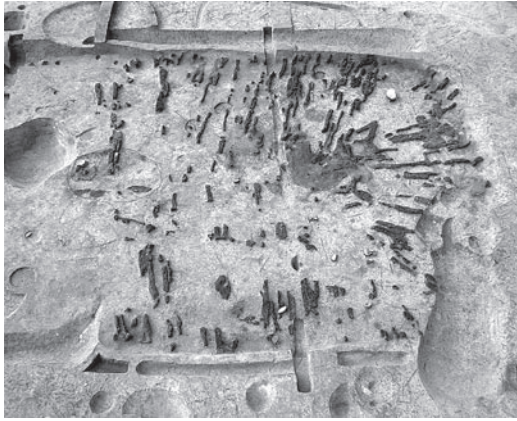
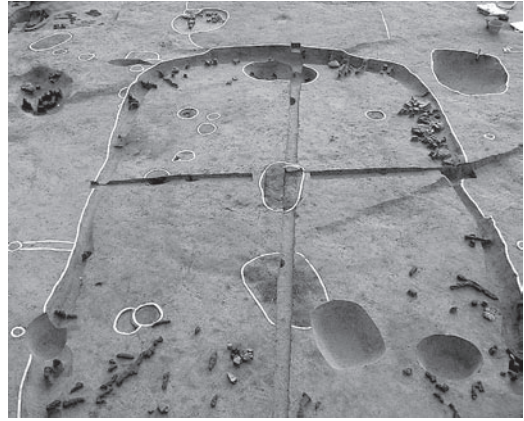


図3 大型掘立柱建物跡SB17 (1 : 100)



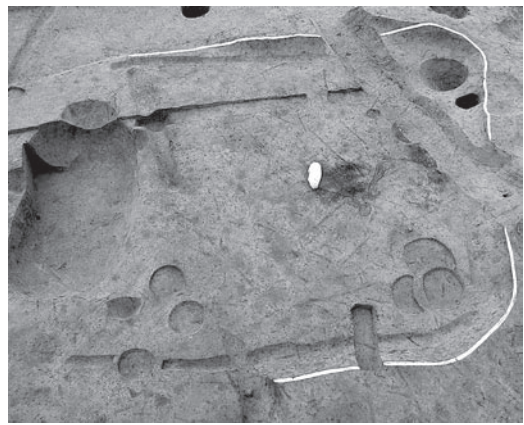
大型竪穴住居跡 SB18 炭化材遺存状況



大型竪穴住居跡 SB55 全景 (中央上寄りが立石を埋設した炉)



竪穴住居跡 SB99 全景 (中央が土器埋設炉)



竪穴住居跡 SB57 全景 (中央やや右寄りが立石を埋設した炉)



大型竪穴住居跡 SB75 全景



独立棟持柱建物跡 SB77 全景